逃鬼の精

花田春兆

幽鬼の精——上田秋成の作品と生涯——

©著者　花田春兆

昭和六十年九月　初版発行

発行者　高木智夫

印刷　朋文印刷所

製本　風林社塚越製本

発行所　株式会社こずえ

東京都杉並区宮前5—26—38

電話　東京三三二—三〇八一

JSBN4—87557—504—1　C1023　¥2200E

目

次

ひとりの墓――序章にかえて……7
第一章　みなし蟹……13
蟹の指と黒雲と　14
拙は浮浪者　24
芭蕉もやくざじゃ　30
第二章　ひとり武者……43
古えの道　44
「猿」と「妾」と　53
俄か医者　64
第三章　雨やみ月いでて……79
鯉となった画家　83
不吉な釜鳴り　99
雨やみ月いでて　113
第四章　日の神はいずくにも……123
山荒れは禍つ神の仕業か　124
日の神はいずくにも在す　137

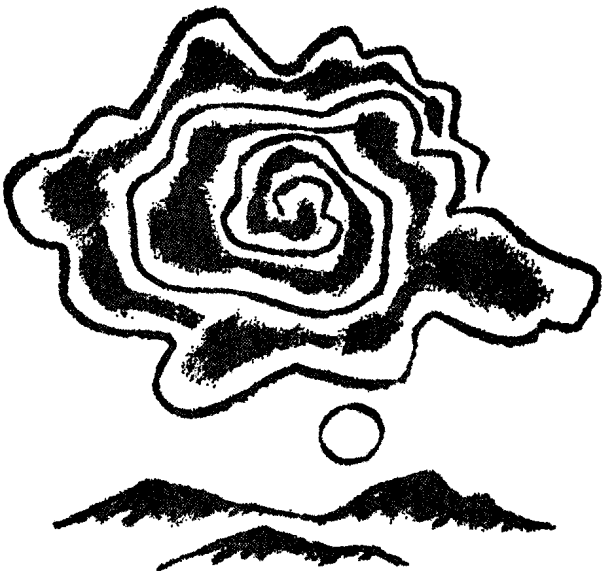
第五章　鶉棲む野……157
くすし廃業　158
鶉居の静けき日々　167
思いの雲晴れぬ　181
第六章　瑚璉尼よ……191
稀れなる友垣　192
瑚璉尼よ、何故我を捨てし　202
蟹の横走る身は……　221
第七章　春雨いく日降りて（上）……231
第八章　春雨いく日降りて（下）……253
死後の褒貶——終章にかえて——……277

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀挿画・二俣英五郎

幽鬼の精——上田秋成の作品と生涯——

ひとりの墓——序章にかえて——



私がはじめて無腸・上田秋成の墓に接したのは、五年ほど前の盛夏の一日であった。

ある全国的な障害者問題の研究団体の集会に出席した機会を利用して、永年懸案となっていた秋成への墓参を果したのである。

養護学校の教師たちが主力を形成しているその組織では、年一度の全国集会を夏休みに開くのを習いとしている。暑い最中に暑い土地を選ぶのだから……と悪口しながら、誘われるままに、京都入りした私だった。そして大会の二日目の分科会の会場である立命館大学の衣笠校舎へと向う車を、南禅寺門前へと廻らせたのである。

西福寺はすぐにわかった。人通りも稀な界隈である。いわゆる三伏のただ中とも言うべき日だったが、まだ朝曇りの時刻で覚悟していたほどの暑さはなく、蟬時雨も湧いてはいなかった。

案内を乞うといかにも京都らしさを湛えた年配の婦人が現れて、車イスのままでよいから、と廊下を歩まれる。学生ボランティアを二人同行していたおかげで、黒光りのする玄関の数段をかつぎ上げて貰ったのは幸せであった。

墓は廊下というか、座敷について曲る縁側に面したみどり深い内庭の一隅に置かれていた。写真で見ていたようなしっとりした墓らしさは無かった。薄れはじめた雲から滲んでくる朝の光が、庭を明るくしていたためかもしれない。ともかく、それと指されなければ、庭石の一つとし

て見過ごしてしまっても、何の不思議もないような存在であった。もっと言うなら、もう少し軒端に近ければ、手水鉢を置く石というところだな、と感じたほどであった。現代の若い人にはぴんと来なくなっているだろうが、昔の日本家屋にはよくあった廻り縁の突当りの厠の、軒先に据えられた手洗い用の水鉢を置いた台の石、そんな感じがふとしてしまったのである。なんとも不敬の念だとは自分でも認めるのだが、そんな印象を抱いてしまったのだから仕方ない。

それほどに墓は、完全に庭の一部として溶けこんでいた。墓にまとう陰湿さは露ほども無く、むしろあっけらかんとさえしていた。狷介不遜がレッテルとなり、雨月物語の幽鬼の世界を現出させた上田秋成その人の墓としては、何か拍子抜けめいたものをさえ覚えさせる静かさであり、明るさが満ちていた。

おおよそ墓地というイメージからかけ離れた庭の一隅を、死後の安住の地に選んだのは何故だろうか。孤高をもって任ずる性が、死後も俗人たちとの近隣づきあいを強いられることを嫌ったのか、自らも外剛内柔と認める性の、本来の人恋しさが、死人ばかりの墓地の淋しさに堪えきれなさを抱いたのか。ただ一つだけ置かれた墓なのである。

その石には、『上田無腸之墓』と彫られている。秋成でもなければ、雨月物語の署名〝剪枝畸人〟でもなく、ましてや本名の東作でもない。歌人として使われたともいうが、初期の漁焉とともに俳号であった無腸なのである。読本作者としてより、歌人・俳人として葬られることを彼も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

望み、周囲の人もそう認めたのだろうか。
そして無腸なる語が、蟹の甲羅の外見から出た別名であることは明らかだ。さらに〝剪枝畸人の剪枝も、鋏からひいて蟹を意味することばとなっているのだ。それを明示するかのように、墓石の台には彫られた蟹が姿をのぞかせている。
——外剛にして内柔、眼ばかり高く、横行をもって直しとなす——として秋成が、自分自身を蟹にたとえていたことは、世に知られている。だがそうした性質とともに、或いはそれにも増して、形態上からも彼は蟹に執していた。五才のときかかった悪性の痘瘡が原因で、右手の中指と左手の人指し指が曲って短かくなったままとなり、人間の手というよりも蟹の鋏の形に近くなっていたからである。箸も筆も、持つというよりははさんで用を足す状態だったのだ。
ただ、秋成が晩年眼を病んだことは知られていても、生涯をそうした指で過ごしたことは案外知られていないらしい。同行してくれた二人の学生ボランティアも、秋成については明らかに関心を示していたが、指のことは初耳だと言っていた。

「あいにく住職は留守ですが……」
とことわりながら老婦人は、秋成に関わるものをこまごまと見せてくれるのだった。研究書が多かったが、そうした書籍の積まれた床の間に、写真ではお馴染みの秋成の座像がさり気なく置

かれていた。写真で想像していたよりは遙かに小さかった。書物の間にちょこなんと座って、何かの人形と見過ごしそうであった。ちいささが可愛らしくさえ見せていた。眉間から鼻にかけては確かに癖のある人物らしさを漂わせていたが、目尻から頬を埋めた皺の表情は、むしろ好々爺とでも言いたいものを貯えていた。

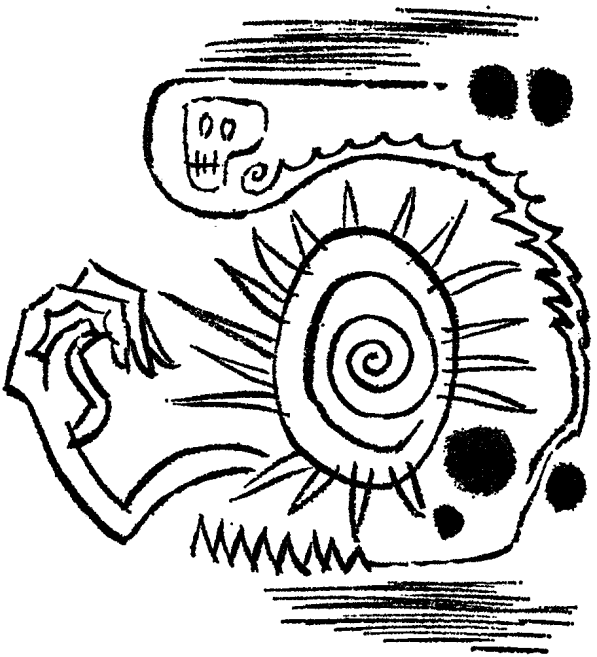
「ちょうど背の高い学生さんがおいでだから……」

と老婦人はさらに、縁側の突当りの天袋から遺筆の軸物を取寄せて、丹念にひろげて見せられる。紐を解いて開かれる間、何故か私は詰屈な角張った字を予想したのだが、現れたのはむしろ滑らかな丸味のある筆跡であった。考えてみればはさんで書いては指先の力が入らないのだから脳性マヒならスパスティック形の〝みみずの昼寝〟タイプの字になるのが当然で、私のようなアテトーゼ型の〝エビのひげ〟タイプの字になる筈はなかったのである。だが、それにしても意外なほどに円かと呼びたいほどの筆跡だったのである。

気がつくと、分科会のはじまる時刻はとうに廻っている。私にとってこちらが重要だとしても道草は道草である。急いで行かなければならない。正直のところこのままに居残って、この白々とした無賜の墓が、深まって行く夕闇の中でどのように表現を変えて往くのかを見たかった。心は残った。

そして、もしそのままに西福寺の縁側で一夜を明かせるならば、あるいは秋成の心の物語を聞くことが出来るかもしれない、とも思った。雨月物語の冒頭の「白峯」のように……である。もとより私に西行の役が果せるという自信などありはしないのだが……。」

第一章　みなし蟹



蟹の指と黒い雲と

人間生きている間にはいろいろな目に会うものじゃが、めぐり会う出来事などとの関係ばかりでなく、はっと目が覚めたようにわれをとりもどすときがある。確かに生きているのじゃなと、しみじみ思えてきて、それまでの自分は本当には生きておらんじゃったような気にもなってしまう。普段は、生きておるなどとも思わずに暮らしておるのだろうよ。なかには一生涯そんな覚めた気分を知らずに過ごしてしまう人間もおるじゃろ。いや、本当に覚めた瞬間を持つ者の方が少ないのかもしれぬ。

拙は、そうした覚めた瞬間を幾度となく味わっておる。

ああ、拙とは自分のことじゃ。拙者では武張りすぎて好まぬし、京都に出る頃から頭は丸めておった筈じゃから、形だけなら拙僧と言えなくもなかろうが、仏くさいことも嫌いじゃ。老と呼ぶこともあるが、まだ若い頃を語るのにわざわざ老でもあるまい。よって拙で通すことにしてしまうに決した。

覚めた瞬間というのは、だしぬけにほかりと来ることも多い。若い日、嶋屋の坊とやら呼ばれ

て茶屋酒に酔うての翌朝、一杯の冷水にはっと目ざめる、そんな感覚のこともある。その頃は飲めもせんのに、よう飲みに行ったものよ。後の母なる人もよう出来た人で、黙って枕元に冷たい水を置いておいてくれたもんじゃった。

そんな、ほかりと来るときばかりではない。重々しい予感が先立って来ることもある。もっとも後になって予兆だったなと気づくだけで、その最中は重苦しいばかり、暗いばかりの世界へ閉じこめられてしまって、身動きも出来なくなってしまう有様じゃ。夕立ちの前の真っ黒な雨雲がすっぽりとそのまま、この身のほとりに降りて来て立ち籠め、わが足元さえ見えなくなり、われともなき眠りに引入られてしまうのじゃ。

ただし、ほかりと訪れるのと違うて、この重苦しいおどろおどろしきものは、われみずからなすものではない。われならぬものの力が、この身に加えられておるのじゃ。さもなければ何で、黒雲めいたものが地まで降りて来ようぞ。それが何であるかは知らぬ。ときによって異るかもしれぬ。〃狐づき〃とも、〃おこり〃とも、呼びたければ呼ばせておけ。それが神でないとは、誰が断言出来ようぞ。少なくとも拙にとっては、神よりも眼に見え、力を持った存在なのである。

この黒雲めいたもののそもそもの発生が、五歳のときに患らった痘瘡の折の高熱に関わりがあろうとは、(やり終せなかったとしても)医師をつとめた拙にわからぬ筈はない。それは極めつきの悪性の痘瘡じゃった。生命さえ危うなったのだ。父母が加島神社へ必死に祈って漸くとりとめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c